

最近の調査研究による北バクトリアの仏教僧院址ファヤズテパ

T. K. ムクルティチェフ

(モスクワ国立東洋美術館)

中央アジア考古学の研究者たちは、インドから中国への仏教流伝の歴史に関する諸問題の研究に著しい貢献を為した。早くも 1926～1928 年に、A.S.ストレルコフは東洋美術館による中央アジア調査の期間に、彼が仏教的施設に考定していた幾つかの遺跡を北バクトリアの古テルメズ都城址の周辺部で発見した (Стрелков 1928 : 41-47)。これら考古学的遺跡は、すでに 20 世紀初頭には古代における仏教の存在が知られていたガンダーラと東トルキスタンの二大地域に挟まれたバクトリア地方に、仏教遺跡が存在することを初めて示すものであった。その後、中央アジアの様々な文化史的地域において、仏教と関連した異なる時代の 30 以上の多様な遺跡が発見された。これらの遺跡は、中央アジア (言うまでもなく、ここでは中央アジアの全ての文化史的地域を指すものではない) が仏教史における二つの重要な文化史的過程—インドから中国への仏教の流伝と、後代の、中国からインドへの仏教徒巡礼者の往来—を結ぶ著しい役割を果たしたことを示している。中央アジアにおける仏教史および上述の過程については、B.A.リトヴィンスキーや B. Ya. スタヴィスキイという、この地域の傑出した研究者たちの著作等に詳述されている (Литвинский, Зеймаль 1971; Ставиский 1998; Litvinsky 1968; Litvinsky, Zeimal' 2004; Stavisky 1993/94: 113-142)。本稿筆者 [ムクルティチェフ] も中央アジアの仏教史に関して著書を発表した (Мкртычев 2002)。

中央アジアの文化史的地域において、仏教遺跡は、バクトリア・トハリスタン (南ウズベキスタン、南タジキスタン、北アフガニスタン、北西トルクメニスタン) で最も多く発見された。スタヴィスキイは、様々な時代の 16 の仏教遺跡について記述している (Ставиский 1998 : 15-20, Fig.1)。

この地域の仏教遺跡の重要拠点の一つは、古テルメズ都城址から北西に 1km の地点に位置するファヤズテパ僧院址と考えて相違ない¹。

1968年から1976年にかけて著名な考古学者L.I.アリバウムによってファヤズテパ僧院址の発掘調査と研究が行われた。その後さらに数年にわたり、アリバウムは幾つかの区画で清掃作業を行い、細部を確認し、建築学的測量を実施した。遺跡では、ファヤズテパを世界的に有名にした仏教美術品が発見された。とりわけ、菩提樹下の仏坐像と両脇で合掌する修行僧の石製高浮雕は有名である (Культура и искусство… 1991 : № 122, [『世界美術大全集 東洋編15 中央アジア』作品154. 釈迦如来坐像])。この他、遺跡の代名詞となったのは、クシヤン族の衣装を身にまとった二人の人物像で、このうちの一人の頭上にはバクトリア文字で「ファッロー」の銘文が書かれていた (前掲書 № 119, [『世界美術大全集 東洋編15 中央アジア』作品155.供養者像])。

¹ 遺跡名は調査に協力したテルメズ郷土資料館の R.F.ファヤゾフ館長の名前に由来する (Альбаум 1990: cf.2)。[原著書では「ファヤズテパ」とあるが、本稿では現地語名に倣い「ファヤズテパ」と表記した。]

アリバウムは発掘調査を進める一方、自身の野外調査の概報や、出土遺物に関連した個々のテーマの論文を発表している（Альбаум 1974; 1976; 1982; 1990）。

このほか、アリバウムがファヤズテパにおける自身の野外調査をまとめた総括的モノグラフを準備していたことはよく知られている。しかし、ラザール・イズライレヴィッチ・アリバウムの逝去後、手稿が発表されることは終になかった²。それでもなお、アリバウムの刊行物に基づいて、遺跡の歴史と特徴を全体的に再確認することは可能である。

（アリバウムによる） ファヤズテパの歴史観

仮にアリバウムによって発表されたデータを総括するならば、ファヤズテパの歴史は次の様相を呈するであろう。最初に、この地に円形基台をもつ仏塔が建立されたが、その創建は前11世紀であった。仏塔の周囲には何らかの仏教的施設群が存在した。その後、同じくこの地に、矩形の平面プランをもつ大規模な地上僧院が、統一された設計に基づいて建立された。初期の床面で出土したコインによれば、その建築はクシャン国王「ソーテル・メガス」の治世に当たる。

伽藍は、機能および設計上、中央部の僧院区、北西部の講堂区、南東部の生活区（食堂）の三区画から構成されていた。残念ながら、発表されたファヤズテパの平面図は極めて概念的なものであった（Альбаум 1982: 57-59）。³その際、何れの出版物にも、遺跡の機能の段階については言及されなかった。ところが、筆者が何度も参加したファヤズテパの踏査時に、アリバウムは様々な改築について指摘していた。

研究者 [アリバウム] は、円形基台をもつ最初の仏塔が1世紀末から2世紀初に改築され、十字形の平面プランを持つようになったと考えた。出版物には、タシュケントの建築家A.アサノフのグラフィック復元図が掲載された（Альбаум 1976）。

僧院の機能の終焉は3世紀に比定された。観察の結果、遺跡の崩壊層で複数のヴァースデーヴァのコインが発見されている。僧院はササン朝ペルシアの軍隊によって襲撃され、その機能を終えた。[アリバウムは] この出来事の時期について、ササン朝ペルシアの皇帝シャープール1世とホルムズド1世の出土コインを証拠として挙げている（Альбаум 1990: 26）。

発掘の過程で、遺跡の荒廃後、ファヤズテパ僧院の廃棄された部屋の一部は埋葬儀礼に則った墓のために利用されたことが明らかとなった。墓からはホルムズド2世のコインと5～6世紀に年代比定されるペーローズの模倣コインが一緒に出土した（Альбаум 1990: 26）。この墓は概して、初期中世時代にこの地域に普及していた葬送儀礼に合致していた。

研究者 [アリバウム] は、この地にアラブ軍が出現した時（7世紀末）「全ての部屋は破壊され、砂と崩落した丸天井で埋もれてしまった」と考えた。最終的崩壊の年代は遺跡の上層で発見された銀貨入りの小型壺によって導き出された。この埋蔵コインの中で最も後代のものはヒジュラ暦199年（814-815年）に

² スタヴィスキーと同じく、筆者もアリバウム宅を訪ね、何度となく未完成の手稿を実見した。

³ ウズベキスタン歴史博物館の展示場には、ファヤズテパの詳細な遺跡の平面図が展示されていた。

年代比定されている (Альбаум 1990: 26)。

アリバウムによる ファヤズテパの歴史観における若干の論点

筆者 [ムクルティチェフ] は、バクトリア・トハリスタンの仏教史に関するデータの総括を試みた一連の研究論文において、ファヤズテパに関する全ての情報、かつ遺跡に関する研究者の若干の個人的報告も活用した。筆者は、概ねアリバウムの僧院址に関する基本的見解を受け入れるが、それでもなお、その立場に幾つかの点で同意することはできない。

第一に、アリバウムは、円形基台をもつ初期の仏塔が前1世紀に年代比定される可能性の基礎となる説得力のある論拠を何処にも提示していない。管見では、その創建は、僧院全体の建築と同時期の1世紀半ばである。この年代観は、先述した、初期の床面から出土したソーテル・メガスのコインに関するアリバウムのデータに基づいている。

第二に、仏塔の円形基台から十字形 (星形) への改変は仏塔設計の発展過程の一段階を示し (Franz 1980: 134)、それは4世紀末から6世紀初に年代比定される (Мкртычев 2002: 79–81)。これに基づけば、アリバウムが考定したところの、ファヤズテパの仏塔の十字形 (星形) 基台が1世紀末から2世紀初に出現したという蓋然性はない。類例からみて、ファヤズテパにおける仏塔の基台の同様の改築もまた4世紀から6世紀に年代比定されなければならない。

しかし、仮にこれが事実だとすれば、何故ファヤズテパの仏塔は改築されたのか、そしてその際、僧院は単に廃墟となったのではなく、仏教と何ら関係を持たない住民の墓地として利用されたのか、という疑問が生じてくる (Мкртычев 2002: 79–81)。

第三に、3世紀半ばに短期間、北バクトリアを制圧したササン朝ペルシアの軍隊は、ファヤズテパを含むこの地域の仏教遺跡を破壊しなかった。筆者 [ムクルティチェフ] は、遺跡を何回も訪れたが、故意に破壊された如何なる痕跡も見つことはなく、アリバウムからも具体的痕跡について聞いたことはない。どう見ても、ファヤズテパの衰退の原因は、バクトリアにおける他の多くの仏教遺跡でもそうであるように、この地の統治者が交代したことによるものであり、新しい統治者は土着の仏教教団への保護を取りやめた⁴。その結果、修行僧達は僧院を放棄し、僧院は徐々に荒廃していったのである (Мкртычев 2001: 57)。

(Sh.R.ピダエフ、T.アンナエフ、Dj.アンナエフ、G.フスマンによる) ファヤズテパの歴史に関する最新のデータ

近年、ファヤズテパの研究は継続され、再度この遺跡に対する注目が高まっている。2002年から2006

⁴ バクトリアの各地において新しい統治者の仏教に対する態度は様々であった。ダルヴェルジン・テパ都城址では、街のほぼ中央部に3世紀後半に仏教寺院(DT-25)が建立された(Мкртычев, Русанов 1999)。

年にかけて、ウズベキスタン文化スポーツ省と日本の文化財保護信託基金およびユネスコの協力により実現した遺跡の保存と復元に関する事業の枠組みの中で、ファヤズテパ遺跡において考古学的再調査が継続された。2002年には、T.アンナエフの指導のもと、遺跡の南側（生活区）の部屋で調査が行われた。2003年には、Sh.R.ピダエフの指揮による調査団がファヤズテパの仏塔を研究し、2004年から2006年にかけて遺跡全体の調査を実施した。

これらの調査の結果、我々の遺跡に関する理解を助け、修正すべき多くの新知見が得られた（Консервация... 2006; Аннаев Дж., Аннаев Т. 2010; Fussman 2011）。

ファヤズテパに関する新しい資料の最初の発表は2006年に共著の論考にまとめられた。この中ではじめて、遺跡の詳細な平面図が公表され、三期の建築期に区分された。第一および第二建築期について、著者たちは（誰なのか必ずしも明らかではない）前1～後2世紀に年代比定した。第三期は、本文によれば、2～3世紀に年代比定されねばならないという（Консервация... 2006: 14-119）。しかし、本文中の挿図では四期の建築期が示されている（Консервация...2006: 146-148）。遺跡の年代観にも若干の齟齬が見られる。つまり、ある章では「前1世紀末乃至1世紀前半に伽藍の建築のための設計作業が行われた」とあり、次章では「第一及び第二建築期は明らかに前1世紀乃至2世紀に属する」とある（Консервация...2006: 112, 114）⁵。

しかし、2006年刊行の論考に続いて、Dj.アンナエフとT.アンナエフ [以下、「両アンナエフ」と表記する。]の論文が世に出たが、そこでは発掘担当者の内の一人が、遺跡の歴史的考察と年代観について比較的理路整然と記述している。両アンナエフの考えによれば、ファヤズテパの地に初期の施設が存在し、それは恐らく「同じく宗教的性質」の「仏教的」施設であった。遺跡の南東部で検出されたモニュメンタルな壁の痕跡は、ファヤズテパの歴史における**第一建築期**のものであると見なされ、前1世紀後半から西暦20～25年に年代比定される。この施設が仏教に帰属すると見なした論拠として、著者たちは（Аннаев Дж., Аннаев Т. 2010: 55, 56）、G.フスマンが西暦20～55年（あるいはこれより早い年）に年代比定した碑文群に依っている。しかし、著者たちは、同じく、ファヤズテパ僧院の建築以前に、この地に初期の仏塔をとまなう、何らかの仏教的施設が存在したと見做したアリバウムの考え（Альбаум 1982: 60）を引用していない。

僧院自体の建築は**第二建築期の第1段階**に相当する。アリバウム（Альбаум 1982: 60）は、建築初期について言及しながら、初期の床面、さらには施設の北東部の（創建時の）パフサ壁 [粘土ブロック] から出土したソーテル・メガスのコインを証拠として提示した。著者たちは、1世紀半ば（西暦50年）の絶対年代を提示し、この年代を採用した（Аннаев Дж., Аннаев Т. 2010: 54-56）。

第二建築期の第2段階はウェーマ・カドフィセス王の統治時代に行われた部分的改築と関連している。まさにこの段階において、祠堂は正方形のプランを呈しながら改築された。

第二建築期の第3段階はカニシュカ王のコインによって年代比定される。祠堂は有名な石製高浮彫と

⁵ この出版物は複数の著者の論集であるが、執筆者達の年代観の統一が為されないまま刊行された。当時この著書に対する書評を執筆するつもりであったが、書籍情報も不明で、また誰と個人的に論争をすればよいかわかり明瞭でなかったため、実現できなかった。

壁画で荘厳された。この段階では遺跡の平面プランの様々な変化が起こった(Annaev Дж., Аннаев Т. 2010: 60, 61)。

第二建築期の第4段階はササン朝ペルシアによるバクトリア・トハリスタン右岸地域の征服と関係する。著者たちは、遺跡の(中央部および南部の)一連の部屋における火災の痕跡を明らかにしたが、これは筆者[ムクルティチェフ]が提唱した出来事の一つ〔仏教施設の〕破壊行為ではなく、その荒廃の原因は経済的支援の欠如にあったという筆者の説)に同意できない根拠を与えており、また僧院がササン朝の軍隊によって破壊されたというアリバウムの見解を支持する根拠を与えている。

このほか、著者たちはファヤズテパがその後も仏教施設として機能したと復元している。彼らの考えによれば、4世紀末に、僧院は再び「再建された」という。彼らは、仏塔から北西に位置するゴミ捨て穴に残存していたこの時代の土器の存在を証拠として提示した。僧院の機能の復旧に関する彼らの見解(Annaev Дж., Аннаев Т. 2010: 64)を証明する別の証拠として、フスマンが5世紀初(400年)に上限を置いた陶片文書が挙げられる。

アリバウムと同様、著者たちも5世紀から6世紀に、廃棄された僧院の幾つかの部屋は葬送儀礼の墓地の納骨所として利用されたと考えている。しかし、続けて両アンナエフは、6世紀から7世紀にかけて、僧院の個々の区画と仏塔は仏教の信仰施設として機能を保ち続けたと述べている。このような結論の根拠は、遺跡から出土したこの時代の土器である。著者達は、遺跡の上層で発見されたアラブ時代の一括コインに基づき、ファヤズテパが8世紀初頭に廃墟と化したとする、アリバウムの考えに同調している(Annaev Дж., Аннаев Т. 2010: 65)。

ファヤズテパの歴史

(本稿筆者[ムクルティチェフ]の考察)

筆者はここで、すでに指摘されたことを考慮に入れ、刊行物や個人的印象に基づき、バクトリア、広くは中央アジアにおける仏教流伝の研究上重要な位置を占めるファヤズテパ僧院址について、さらには新たに発表された情報とこの遺跡の歴史について所見を提示する。

両アンナエフの資料による遺跡の年代と時代区分は疑問を生じさせ、幾つかの確認を要する。まず何より、遺跡の歴史についてはより長期的な年代間隔をもって、そして建築的時代区分についてはより短期的年代間隔をもって、論理的に述べなければならない。

遺跡は、統一されたプランに基づいた同一時代の建築物である。著者たちによる再調査で検出された初期の建築遺構は、ファヤズテパ僧院址とは何の関係も有しない(つまり、より古い時代の壁が仏教僧院と結びついているという、いかなる証拠も存在しない)。従って、形式論理学に従えば、これら建築物の痕跡は仏教僧院の第一建築期には当てはまることはない。

アリバウムが「発見し」前1世紀に年代比定した、いわゆる円形基台をもつ仏塔と、両アンナエフが

前1世紀末から1世紀初めに年代比定した(Консервация..., 2006: 112)⁶建築物は、遺跡の最初の研究者[アリバウム]の誤謬以外の何ものでもない。2003年の新たな発掘に基づき、Sh. R. ピダエフは、僧院の仏塔がいかなる時代にも、円形や十字形(星形)の基台のプランを呈していなかったと説得力を持って示した。それは、当初から南側に階段をとまなう長方形の基台(18.16 x 16.74 m)を呈していたからである。最近の発掘の著者[ピダエフ]は、最初に基台の中央部に高さ2.6mの円蓋を伴った胴部径2.62mの仏塔が配置されていたと考え、初期の仏塔の建築を1世紀後半に年代比定している。その後、同じ基台に、胴部径約8mの新しい仏塔が建立された。それは恐らくカニシュカ王の統治時代に当たるであろう(Пидаев 2006: 34, 35, 42)。

アリバウムに続いて、両アンナエフは、ソーテル・メガスのコインに基づいて年代比定を行い、遺跡の建築について上述の通り、西暦50年の絶対年代を提唱したが⁷、今日のクシヤンの年代学ではこの国王の統治は1世紀末に相当するので(Ворпараччи 2007: 50)、齟齬を生じる。

まさしくソーテル・メガス(ウェーマ・タクト)の治世下に、バクトリアと北西インドが一つの国家に統合された時、バクトリアにおける仏教流伝の潮流が始まったことはすでに述べた。それは、バクトリア地域における僧院や仏塔といった様々な大規模の仏教施設をとまなっていた(Мкртычев 2002: 18)。これには[グレコ・]バクトリア時代の古典的設計の仏教僧院をもつファヤズテパ僧院址も含まれている(Dutt 1988: 214, 215)。

遺跡に存在する複数の改築の時期に関して時代を特定することは難しい。共同執筆による報告論文の著者たちは祠堂における3つの床の存在を明らかにしている。その際、最も新しい床は祠堂の最後の改築に相当し、改築の結果、西壁の中央に通路が設けられたという。文化層の高さは最初と最後の床の間で0.5mに達する(Консервация... 2006: 89)。従って、施設の機能した時代は3時期にわたって存続していたとすることができる。

ササン朝ペルシアの軍隊はバクトリアにおいて仏教遺跡の破壊を行わなかったという筆者の考えを改めて述べておこう。私は、クシヤン朝時代のバクトリアの仏教遺跡(カラテパ)で何度も調査を行い、ファヤズテパの発掘現場を訪れ、スタヴィスキーやアリバウム(仏教遺跡の主要な研究者たち)と何度も意見交換を行った。現時点ではゾロアスター教徒(ササン朝ペルシア軍)による仏教信仰施設に対する排他的認識と結び付けられるかもしれない、クシヤン朝時代の仏教遺跡の大規模な破壊の痕跡は確認されていないのである。今の所、この考えに対する反論の唯一の根拠は、両アンナエフによってファヤズテパで確認された火災の痕跡だけである。とはいえ、火災は当時の僧院における僧自身の不注意の結果であったとも言えるし、廃絶期の偶然の来訪者がもたらした結果であったという蓋然性も排除できない。フスマンは筆者と同じ見解を堅持していることを強調しておこう(Fusman 2011: 267)。

⁶ この見解は筆者不明の論文集の「大邸宅と仏塔の考古学的発掘調査の結果に基づく総論」の章で叙述されている。しかし、フスマンはファヤズテパの碑文に関する研究において、アンナエフ説に疑問を投げかけた。(Fusman 2011: 265)。

⁷ 著者たちは、ソーテル・メガスのコインの最初期の発行年代の証拠として、カンピルテパ都城址の複数の層から、パルティアのゴタルゼス2世(在位41-53年)のコインとともにそれらのコインの出土した例を挙げている(Аннаев Дж., Аннаев Т. 2010: 55)。私[ムクルティチェフ]は、貨幣学の専門家ではないが、いずれにせよ、この例示は、著名な学者達(O.ボベラッチ、E.V.ルトヴェラゼ、Dj.クリップ、R.ブレイスイ)の定説に基づくクシヤン年代学を見直す為には明らかに根拠が不十分であると考えている。

4世紀末に僧院が「再建された」という両アンナエフの主張は証明されてはいない。上で言及したこの時代の土器の発見の事実以外で、また碑銘学的資料を50～400年の間隔で年代比定したG.フスマンの見解以外で、著者たちは彼らの主張を支持する他の証拠を提示していない。

4世紀末に僧院で行われたという改築作業について、出版物には何一つ言及されていない。もしかすると（残存した部屋の）僅かの敷地が仏教僧院としての機能を保ち続けていたのかもしれない。仏教徒巡礼者が廃棄された僧院を「聖所」として訪問した蓋然性も排除できない。このような来訪が5世紀半ばまで続いていたかもしれないことは陶片文書が証明している。フスマンの考えによれば、遺跡で発見された最も後代の碑文は400～450年に年代比定できるという（Fussman 2011: 267）。

ファヤズテパの廃屋の一部が5～6世紀における埋葬の儀式に則り、墓地のために利用されたという事実に異議を唱えるものはない。これは、トハリスタン、とりわけ古テルメズにおける初期中世の葬送儀礼の一般的様相と一致している。しかし、両アンナエフによれば、その後、すでに6～7世紀には僧院の幾つかの部屋や、あるいは仏塔は信仰施設として機能し続け、このことは土器資料が証明しているという（Аннаев Дж., Аннаев Т.2010: 65）。

管見では、6～7世紀における信仰施設としての遺跡の一部だけでも、僧院の機能を復元するには、この時代の日用土器群の出土資料がまだ不十分である。私たちは、かつてカラテパ洞窟・地上コンプレクス〔複合遺構〕の発展過程を分析し、遺跡において4～5世紀に逆説的な状態になったとの結論に達した。それは幾つかの施設は仏教信仰施設（例えばコンプレクスD）として機能し続けた時、隣接する洞窟では都市住民は埋葬の儀式に則り死者を埋葬していた（コンプレクスE）（Staviskii, Mkrtychev 1996: 228）ということである。しかし、このような過程がファヤズテパに認められると述べたデータはいまのところ存在しない。碑銘学的史料が証明しているが、最後の僧は凡そ5世紀半ばに遺跡から立ち去っている（Fussman 2011: 267）。

上記はファヤズテパの歴史について若干の別の様相を提示した。以下に提起する遺跡の様相はあくまで復元であることを断っておきたい。残念ながら、最初にアリバウムによって、後にウズベクの調査隊によって得られた資料の一部は活用できる状態にはない。それはすなわち、新たな資料と新しい事実が発見されれば、提起された復元を変更しなければならない可能性も意味している。

かくして、ファヤズテパはバクトリアにおける仏教遺跡の大規模な建築が始まった枠組みの中で1世紀後半に創建された。遺跡の歴史は以下の3段階に区分できる。

第1段階—ファヤズテパの仏教信仰施設としての建築と機能。祠堂における三枚の床の存在から、この段階は次の3期に区分できる。

第1期—建築と能動的機能、初期の仏塔の建立。この時代を通じて修復と改築作業が続けられた（1世紀後半～2世紀前半；ソーテル・メガスーウェーマ・カドフィセス）。

第2期—能動的機能の時代と部分的改築。この時代を通じて修復と改築作業が続けられた（ウェーマ・カドフィセス—カニシュカ）。

第3期—部分的改築と祠堂の内装の仕上げ。仏塔の新しい胴部の建立（カニシュカ—ヴァースデーヴァ）。

第2段階—廃棄の過程。ササン朝ペルシアによるバクトリア占領が著しくなっていく。この時代に僧院

の衰退が徐々に起こっていた。3世紀後半にはじまり、5世紀半ばまで、まだ最後の僧は崩壊していく僧院を廃棄していなかった。

第3段階—廃絶した施設が墓地として機能（5-6世紀）。

この地にアラブ人が出現した7世紀末に、遺跡は廢墟と化し、その際銀貨の入った小型水差しが埋められたとするアリバウムの考定に同意するべきである（Альбаум 1990: 26）。

僧院の門の方位：その居住者と来訪者の構成について D.J.アンナエフ、T.アンナエフの結論と仮説に対する幾つかの論点

両アンナエフは「僧院の門が南東に設けられていたことは創建当初から仏教僧院がクシヤン朝の都市タルミターテルメズの住人のためであったことを証明している」と記述している（Аннаев Дж., Аннаев Т. 2010: 57, 58）。この発言の核心では、極めて複雑な問題に触れている。タルミタの住人がクシヤン朝時代にどのような宗教的属性にあったかを述べることは困難である。何故著者たちは、ファヤズテパ僧院の門の方角がそこへの来訪者及び住人の構成と関係があったと断定したのか。これに答えることは不可能である。

クシヤン朝時代の古テルメズ地域に記念碑的仏教施設が、支配者階層の在家信者によって創建されたと見なすことはできるが、この時代に仏教がバクトリア全土に大規模に広まったということを意味してはいない。ところで、V.Vヴェルトグラドヴァは、カラテパとファヤズテパ出土の碑文を分析し、現地の知識人が仏教を保護していたという結論に達した。と同時に、「古テルメズの現地住民に関しては、かなり閉鎖的宗教共同体で、日常生活に影響を与えず、基本的に巡礼者に対応した教団とは密接な関係はなかったという印象を受ける」と述べている（Вертоградова 1995: 44, 45）。

ファヤズテパの修行僧の中に都市住民はいたか、また僧院の居住者の民族構成はどのようなものであったか。これらの疑問に対する最終的解答もまた今のところ見出すことはできない。ファヤズテパ出土の碑文を分析したフスマンは、僧院の居住者がどのような出身であったか、彼らは、インド人、バクトリア人、東イラン人、あるいは中央アジア地域出身者の誰であったかを特定することは難しいとの結論に達している（Fussman 2011: 267）。

古テルメズの水路について

両アンナエフによる補足的調査の期間に「(東側の) 小仏塔の南東隅で」土器の連結遺構(土管)が検出された。この発見は彼らに、僧院の給水施設の水源が「クシヤン朝の都市タルミターテルメズの郊外の北端沿いに」通る水路であった、あるいは「アイルタム仏教僧院址に類似した」井戸であったという仮説を述べる可能性を与えた。（Аннаев Дж., Аннаев Т. 2010: 59）。著者たちはアイルタムの歴史について書かれた論文を引用し根拠とした（Ртвеладзе 1995）。その際、著者たちは、古テルメズ都城址の北限沿いに走る土壘が防御施設ではなく、水路の痕跡であるとの問題を提起し、その後粘り強く立証したアリ

バウムの研究に言及していない(Альбаум 1990: 19, 20; 当該問題の研究文献に関してはСтавиский, 1998: 44, 45. Прим.49を参照のこと)。筆者は、アリバウムの著作権について想起しながら、つい最近まで彼の見解は古テルメズ研究者達に支持されていなかったことを強調しておこう⁸。筆者は、アリバウムの見解に同意するとともに(Mkrtychev 1993/1994: 119)、彼の仮説を支持する(もしくは反論する)真摯な研究が必要であることを指摘しておきたい。従って、両アンナエフにより発表された水路に関する指摘は、その存在が全て認められかつ立証されたという誤った印象を与えているが、これは全くそうではない。

現在、ファヤズテパは修復され、そして考古学的遺跡も発掘当初の姿を失っている。おそらく、ここで、再度考古学的調査が行われることも、またその結果として新たな情報を得られる可能性も少ないであろう。今と成っては誰にも問いかげられない多くの問いに対して答えを与えるであろう、失われたアリバウムの手稿が見つかることには大きな疑問が残る。本稿は、ファヤズテパの土器をより詳しく発表し、修復作業の間に行われるであろう、非常に興味深い考古学的観察を論理的に解説していくことの必要性の点で、アンナエフ両氏の研究を促す一助になるかもしれない。その時、これはファヤズテパの歴史的問題に関する上述した視点に何らかの影響を与え、ここで提示した時代区分は変更されるか、あるいは再確認されるかのいずれかである。

(川崎 建三訳)

参考文献

- Альбаум Л.И. Раскопки буддийского комплекса Фаязтепе (по материалам 1968–1972 гг.) // Древняя Бактрия. Л., 1974.
- Альбаум Л.И. Исследования Фаязтепе в 1973 г. // Бактрийские древности. Л., 1976.
- Альбаум Л.И. О толковании каратепинских комплексов (в свете раскопок на Фаяз-тепе) // Буддийские памятники Кара-тепе в Старом Термезе. М., 1982.
- Альбаум Л.И. Живопись святилища Фаяз-тепе // Культура Среднего Востока. Изобразительное и прикладное искусство. Ташкент, 1990.
- Аннаев Дж., Аннаев Т. Архитектурно-планировочная структура и датировка буддийского монастыря Фаяз-тепа // Традиции Востока и Запада в античной культуре Средней Азии / Под ред. К. Абдуллаева. Ташкент, 2010.
- Асанов А.А. Фаяз-тепе // Строительство и архитектура Узбекистана. 1976. № 6.8
- Вертоградова В.В. Индийская эпиграфика из Кара-тепе в Старом Термезе. М., 1995.
- Консервация и реставрация руин Фаяз-тепе: Обобщающий отчет. Ташкент, 2006.
- Культура и искусство древнего Узбекистана. Кн. 1. М., 1991.
- Лигвинский Б.А., Зеймаль Т.И. Аджина-Тепе. М., 1971.

⁸ この土塁の用途に関する個人的意見交換において、ピダエフ氏は、彼が行った水準値の測定結果は、土塁のレベル値がファヤズテパのレベル値よりも著しく低く、かつアムダリアからの自然流入の可能性は除外すべきことを示していると伝えてきた。クジャン朝時代に機能したかもしれない給水装置(チギリヤ)の存在の可能性は今のところ証明されていない。

Мкртычев Т.К. Буддизм в Термезе // Термез – древний и новый город на перекрестке великих дорог. Ташкент, 2001.

Мкртычев Т.К. Буддийское искусство Средней Азии(I–X вв.). М., 2002.

Мкртычев Т.К., Русанов Д.В. Второй буддийский храм на Дальверзин-тепе (ДТ-25): история функционирования: VI Чтения памяти проф. В.Д. Блаватского. К 100-летию со дня рождения. М., 1999.

Пидаев Ш.Р. 2.6. Археологические исследования. 2.6.1. Исследования ступы Фаяз-тепа // Консервация и реставрация Фаяз-тепе. Обобщающий отчет. Ташкент, 2006.

Ртвеладзе Э.В. К периодизации буддийского комплекса в Айртаме // ОНУ. 1995. № 5–8.

Ставиский Б.Я. Судьбы буддизма в Средней Азии. М., 1998.

Стрелков А.С. Доисламские памятники // Культура Востока. Вып. 2. М., 1928.

Bopearachchi O. Some observations on the chronology of the early Kushans // Des Indo-Grecs aux Sassanides: donnees pour l'histoire et la geographie historique. Paris, 2007 (Res Orientales: V. XVII).

Dutt S. Buddhist Monks and Monasteries of India. Delhi, 1988.

Franz H.G. Stupa and Stupa-temple in Gandharan Regions and in Central Asia // Stupa. Its Religious, Historical and Architectural Significance. Wiesbaden, 1980.

Fussman G. Catalogue des inscriptions sur poteries // Pidaev Sh., Annaev T., Fussman G. Monuments Bouddhiques de Termaz. I; I, 2. Paris, 2011.

Litvinsky B.A. Outline History of Buddhism in Central Asia. Dushanbe, 1968.

Litvinskij B.A., Zeimal' T.I. The Buddhist Monastery of Ajina Tepa, Tajikistan. History and Art of Buddhism in Central Asia. Rome, 2004.

Mkrtychev T.K. Buddhist Ritual Practice of Kara-Tepe based on materials of complex E // Silk Road Art and Archaeology. V. 3. Kamakura, 1993/1994.

Stavisky B.J. The Fate of Buddhism in Middle Asia (in the light of archaeological data) // Silk Road Art and Archaeology. V. 3. Kamakura, 1993/1994.

Staviskii B., Mkrtychev T. Qara-Tepe in Old Termez: On the History of the Monument // Bulletin of Asia Institute. 1996. V. 10.

付記 本稿は、Т.К. Мкртычев, Буддийский монастырь Фаяз-тепе (Северная Бактрия) по исследованиям последних лет. // Российская Археология, 2013, № 2, с. 119–125. の日本語訳である。著者ムクルティチェフ博士の許諾を得て翻訳を試みた。本文中 () は原著書に準じ、[] は訳者が添付し、注は一部抄訳および加筆した。

Fayaz-Tepe Buddhist monastery in Northern Bactria:
in the light of result investigations.

Mkrtychev T.K.

(The State Museum of Oriental Art, Moscow)

The article cites different views on the history of Fayaz-Tepe Buddhist monastery in Old Termez, which is one of the key Buddhist sites in Northern Bactria. L.I. Albaum conducted archaeological excavations at the monastery in 1968–1976. The author of the excavations published a series of articles which reconstruct the history of the monastery. The additional excavations that were conducted during the restoration works in 2002–2006 yielded important new material concerning the history of the site and the details of its layout. In view of the new data that has been published, the author of the present article offers his version of the history of Fayaz-Tepe Buddhist monastery.*

*Т.К. Мкртычев, Буддийский монастырь Фаяз-тепе (Северная Бактрия) по исследованиям последних лет. // Российская Археология, 2013, № 2, с.119, abstract.